

◆「戦雲」——十一月十日、長井市で「戦雲」を上映する。この十年間沖縄の基地問題をドキュメンタリー映画で鋭く提示してきた三上智恵監督の最新作である。過去四作「標的の村」「戦場ぬ止み」「標的の島 風かたか」「沖縄スバイ戦史」すべて長井市で、新野祐子さんたち仲間と自主上映してきた。「戦雲」は宮古・八重山諸島に、自衛隊の（米軍では無い）ミサイル基地計画が出てから完成までの地元民たちの様々な姿を追う。「国防」ではない、自ら「標的にされる島・日本」を造り、戦争へと進むこの国の現状を観る者に問う。ポスター、チラシに上映日時を入れ、上映実費捻出の二百五十枚販売に向け仲間たちと手分けして動きだしたが、私自身は心身アップアツプでもある。

梅津純子

◆「展景」No.115を繰ってみると昨夏も暑かったのだな、今年はとりわけと言いついて不活性化していたが。梅の実が十粒しか生らず梅干し作業ができなかったという、暑い日差しの有効利用がなかったせいもある。それでもお盆のころになり人が動く、心身も動くようになる。自分の将来（終活？）を具体的に考えたり、言い置くことをまとめてみたり。また、今夏は二〇〇〇年度中学卒業生のクラス会に参加し、大人同士なんだか師弟なんだか混然とした交流を楽しんだ。普段はあまりないが、何かの機会での年代と接すると、年齢構成比によらず、若い人・中堅諸氏にこそ時代を背負ってもらっているのだと実感する。

大橋千佳子

◆乗り鉄を始めて、一年はたつよう。土日、日帰りでいけるところまで、ということのみで関東甲信越のおもな線に、乗ってしまう。これ以上は、宿泊をすることになるな、とおもう。この踏ん切りがつかないので、近場の東武日光線に乗ったり、富士急行に乗ったりもした。後者は、ローカルでお祭り気分といった鉄道だった。外国人が多く、河口湖駅前の狭い足湯（冷たい）に一人つかっていたら、家族連れが入ってきた。身延線に乗り、小海線（これは初めてではない）に乗った。中央本線を使うが、普通は切れ切れで、通し運転が少なく、特急の通過待ちがあることになる。身延線でも同じで、一時間に二本のうち一本が特急で、通過待ちがある。身延線では、静岡県との県境で雷雨にみまわれた。ターミナルの富士駅で落雷、停電で信号機がうごかなくなり、東海道本線に遅れが出てしまう。このときは、ひさしぶりに三島からもどるのにこだまに乗った。いき、あるいは帰りで、または両方で新幹線をつかうこともある。時間的余裕はないことが多く、最小限、駅前に下車するぐらいだが、それでもしれることはある。連続16（17？）駅無人駅という磐越西線に乗った。多くで車内広告が減ったのか、中吊りも含めて使われていない。ホームの看板も枠だけと

いう駅もある。線路には、草ののび放題というところもある。ここまで乗って記憶に残る線（駅）も数多い。そうしてこれでは線が残らないという感じもある。

小野澤繁雄

◆暑い、とにかく暑い夏だった。エアコンなしでは暮らしていけない夏だった。子どもの時分はエアコンなどなかったもので、暑いことは暑い気がしていたが、子どもだし夏とはこういうものだと思っていたのだろう。そう考えると、大人になるあるいは年をとるということは、何とどらしのななことかと思ってしまう。熱中症は屋外よりも屋内が多いとテレビが伝えていた。だとしたらだらしのないなどとは言っておれない。エアコン様々である。「エアコンのリボンの揺らぎ昭和床」

神村ふじを

◆なんとも暑い夏でした。気象予報に「今までに経験したことのない」とか「猛烈な」の修飾語が付けられていました。高齢者は身を護ることに専念しますが、一日中冷房の部屋に蟄居するので、心身のフレイルを予防して夕方の風を頼りに歩行を励行していました。秋に向け心身ともにリセットの準備をします。

河村郁子

◆八月初めの早朝、用事があり近くの本木勝利さんの家を訪ねたら、本木さんの友人二人と頭を突き合わせて何やら話し込んでいた。本木さんの家のすぐ側にあるビニールハウスのビニールがめちゃくちゃに破られ、中に干してあるブラックバスが落とされて土まみれになっていたというのだ。クマカイノシシかどちらかで、この猪突猛進ぶりを見るとイノシシが犯人ということになった。彼らはその日のうちに、あの猛暑の中、ハウスの回りの草刈りをして、ホームセンターから買ってきた電気柵を仕付けたという。彼らは最上川のボスとなっているブラックバスを退治するため、ブラックバスを釣ってきた人に一匹いくらとお金を払い、そのブラックバスをハウスで乾燥し粉碎して肥料を作っている。それで育てたサトイモを食べてもらうというプロジェクトを、数年前から始めている。翌日からイノシシは来なくなつたとのこと。電気柵の説明書にはイノシシに効果があると記されているのは当たっていた。先日、昨年のブラックバス肥やしから作られたサトイモをいただいた。とろとろ滑らかなイモ煮を感慨深く味わった。本木さんはスイカも栽培している。クマは電気柵なんてへっちゃらで、スイカ百個のうち六十個はクマのごちそうになったという。クマの被害はもう四年くらい続いているが、本木さんは懲りずに今夏もスイカを作った。商標登録は「寝ての番スイカ」だそうである。

新野祐子